

てなしてくれました。

病気を治すために特別な住まいがあたえられました。その庭には兼載の好む桜の樹をうえて、兼載の心をなぐさめてくれました。桜の樹は、庭の池にその影をうつして、五十七歳の兼載の心に安らぎをあたえてくれました。また、関東一の名医も兼載のために呼びよせて、その治療にあたらせました。将軍家の一門である古河公方として、できるだけのことをしてくれたのです。

兼載もそれにこたえて、古河公方にあてて連歌をさしあげたり、自分が先生として学んだ心敬から教えをうけた『量感道』という本を古河公方にさしあげたりしました。

兼載の病気をきいて、京都でも北野会所奉行の猪苗代兼載の病気が早くなおるように神社に祈ったり、はるばる関東の古河まで見舞いの使者を送ってきたりしました。